

## 安部公房の初期の作品（2）『異端者の告発』： ニーチェの影響：リルケ，ニーチェ，カフカ

有村，隆広  
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/5378>

---

出版情報：言語文化論究. 6, pp.93-104, 1995-03-10. 九州大学言語文化部  
バージョン：  
権利関係：



## 安部公房の初期の作品（2）『異端者の告発』：ニーチェの影響

——リルケ、ニーチェ、カフカ——

有 村 隆 広

### はじめに

『異端者の告発』は1948年6月（昭和23年）、「次元」の6月号に掲載された。これについて椎名麟三は次のように述べている。

安部公房氏の小説『異端者の告発』を掲載出来たことを喜びたい。氏の特異な表現や観念は、非現実の現実性に馴れることの出来ない既成文壇からは抵抗が多いようである。だが本当に真に新しいものがこのなかに隠されてはゐないだろうか。といふのは編集者は、それを事実としてこの作品に見ることができるからである。<sup>1)</sup>

編集者の椎名麟三は、安部公房の特異な文体が既成の文壇に受け入れられるかどうか、懸念している。しかし同時にまた、この『異端者の告発』のなかには新しい時代の到来をはっきりと感じている。

『異端者の告発』はニーチェの著書、『楽しい知識』„Die fröhliche Wissenschaft“を意識して書いたものと思われる。谷真介氏の年譜<sup>2)</sup>によれば安部は1942年（昭和17年）、旧満州（現在の中国東北部）から東京に戻り、成城高等学校に復学し、その頃、ニーチェ、ハイデッガー、ヤスパース等を読んでいる。

また冬樹社版『終わりし道の標べに』（昭和40年刊）のあとがきで、安部は、「戦争中のあの閉鎖的な空気の中で、リルケとニーチェの間を往き来しながら、実存主義だけをたよ

りに自分を支えてきた」<sup>3)</sup>と書いている。したがって本論で論ずる『異端者の告発』は、おそらく当時の苛酷な体験が基盤となっていると考えられる。

### 第一章 『異端者の告発』の構成

——ニーチェ、カフカとの対比——

#### 1) 冒頭の文章——神の死——

『異端者の告発』は、一人称の物語であるが、作者の安部は主人公に名前を与えてはいない。主人公は冒頭から形而上学的なテーマを抱いて登場する。

この世にはもはや裁く者がいないなどと信ずることが出来るだろうか。しかし事実なのだから仕方がない。

以前まだ神の存命中なら僕のような人間でもさほど心やましく感ずることなく、全存在の憎しみと闘いながらも最後の裁きに身を賭けることも出来たらしい。……

だが、すでに神は死に、一切が人類の手に与えられた今、真の裁き手はもういないらしいのだ。（『異端者の告発』—135頁）

主人公の「僕」は、神の死を認めざるをえない。そして神の死によって、この世のなかのすべてが変わってしまうことを怖れる。つまり、神のかわりに人間がこの世のすべてを決定してしまうことに不信の念を抱き、神なき世界で人間はどのように生きるべきかにつ

いて恐怖を覚える。

このような叙述はニーチェの『楽しい知識』(第5書 343)の冒頭の部分を連想させる。

私たちの快活さが意味するもの——近代の最大の出来事——「神は死んだ」ということ、キリスト教の神への信仰が力を失ったこと、——このできごとは早くもその最初の暗影をヨーロッパに投げ始めている。

(Was es mit unserer Heiterkeit auf sich hat.—— dass, „Gott tod ist“, dass der Glaube an den christlichen Gott unglaubwürdig geworden ist—— beginnt bereits seine ersten Schatten über Europa zu werfen.)<sup>4)</sup>

少なくとも少数の人にとっては、すなわち、その眼の持つ疑惑の力が、このドラマを見ぬくほど十分に強く鋭敏な少数の人にとっては、まさにひとつの太陽が沈み、ひとつの古くて深い信頼が疑問に変わったのが見える。

ニーチェはこの『楽しい知識』のなかで、はっきりと神の死を宣言している。そして「ひとつの古くて深い信頼が疑問に変わったのが見える」という表現は、明らかに神なき後の世界を暗示している。したがって「神の死」という表現に関してのみいえば、この限りにおいて安部とニーチェは同じである。

## 2) 有罪を求めての訴訟の経過

### a) 主人公の「僕」の行動

神に代って人間がこの世界の掟を支配することに反対して、主人公の「僕」は自らもその一人である人間そのものを告発する。しかしそのような訴訟は誰からも相手にされない。「僕」は、公証人、弁護士、警察、裁判所等を毎日のように転々として歩きまわることがいづれからも拒否される。この作品構成は、カフ

カの『審判』 „Der Prozeß“の主人公、ヨーゼフKの無罪証明の無益な努力とよく似ている。ただし、この『異端者の告白』の主人公は、ヨーゼフKとは異なり、自らの有罪を訴える。

主人公の「僕」は、このように毎日のように自分の有罪を訴えて街から街へとさまよっていると、ある日、後を追って来た変な男から次のような意味深長な警告を受けとる。

御注意なされた方が良いですよ。人類の敵と称する、危険な訴訟狂が町をうろついていますからね。(『異端者の告発』136頁)

えたいの知れないこの男は、主人公の「僕」の行動を熟知している。それゆえに当の本人を目の前にして、そのような行為を止めさせようとしている。つまり主人公である「僕」の行為が現実の社会に対応できないことを皮肉たっぷりに理解させようとしている。

訴訟狂と称されている主人公のこのような態度はニーチェの『楽しい知識』の「狂気の男」を連想させる。

狂気の男——諸君はあの狂気の男のことを聞かなかったのか。真昼間、ランプをつけて、広場に出て来て、絶えず「私は神様を探している。私は神様を探している。」と叫んだ男のことを。(Der tolle Mensch——Habt ihr nicht von jenem tollen Menschen gehört, der am hellen Vormittage eine Laterne anzündete, auf den Markt lief und unaufhörlich schrie: Ich suche Gott!)<sup>5)</sup>——広場にはちょうど神を信じない人々が大量集まっていたからたちまちひどい物笑いの種となった。

この狂気の男は、『異端者の告発』の主人公の「僕」に相当する。二人とも神がこの世から消え去った故に不安になり、自分の身の処し方を決めようとする。『異端者の告発』の主

人公は、神なき後、人間がその代りを果たすことに不安を覚え、自分自身を裁判してくれるところを探す。それに対し『楽しい知識』の狂気の男は消えてしまった神をさらに追い求めようとする。

#### b) 周囲の人々の反応

さらに2人の男に対する周囲の人々の反応も、両作品では類似している。安部の主人公の「僕」は、自分自身の罪を周囲の男たちに積極的にアピールする。しかし、男たちは苦笑しながら顔を見合わせるだけで、返事もしない。ついに哀願する調子で、警察に連れていってくれるように頼むが、とどのつまり、金を取られたあげく、ていよく暗い夜道にほうり出される。

神を求めるニーチェの狂気の男も市場にいる人々から嘲笑される。彼らは「それとも神さまは隠れん坊したのか？ 神さまはおれたちが怖くなったのか？ 神さまは船で出かけたのか？」と次から次へと神を冒瀆する発言をなす。両者はいずれも周囲の人々によって無視される。

#### c) 忠告者の存在——河向こうの人

主人公の「僕」には忠告する人がさらに出現する。これはニーチェというよりカフカの小説『審判』„Der Prozeß“にヒントを得たのではないかと考えられる。

主人公の「僕」には常に影のような男がつきまとっている。その男は、主人公の考え、すなわち「自分は人類の敵である」という考えを改めさせようとする。ところがその男は百年前に死んだという河向こうの町の市長に似ている。その市長は〈汝は敵にあらず〉という言葉を残して死んだという。この発言は、主人公の「僕」の意見とはまったく相反するものである。というのは主人公は、自分自身を「人類の敵である」と称して、自分を罰してくれるものを必死になって探し求めている。しかし、主人公は、同時に〈汝は敵にあらず〉という市長の言葉に感動し、河向こうの町を

訪ねる。この町の情景を作者の安部は次のように語る。

白っぽい砂とほこり。X氏の故郷としてはいかにもふさわしい。太陽に焼きつくされてしまった町。もう燃えるものはなにもないのだ。そればかりか、山も川も谷も林も、地面に表情を与えてくれるものは、なにも一つない。ただ数百本の白い路が、どこにつききるともなく塵埃と砂原の中に沈えてゆく。さらに地誌をひもとけば世界一の煤けた町だという。(『異端者の告発』144頁)

X氏の住むというこの町は、終戦直後、焼野原となった日本の各都市を連想させる。さらに「地誌をひもとけば世界一の煤けた町」という表現から類推すれば、原爆が投下された広島と長崎の町を連想させる。またこの町は安部が終戦を迎えた旧満州の町であるとも考えられる。

この町で主人公の「僕」は、百年前の市長のXに会い、なぜ市長がこの「僕」に「人間の権利と資格を強制しようとするか」を問いただしたいと考える。彼は町役場に行き、一人の老人に出会う。その老人はX市長の居所を教えてくれる。給水塔のある広場で主人公は遂にその市長に出会う。市長は彼に次のように忠告する。

まあいい、私の最後の忠告として、貴方がたの馬鹿気た告訴を中止できる余地を残してあることを申し上げて置きますが……さもなければ、やはり、癲癲病院に行くより他ないでしょうね。貴方には、人間がいまだ名づけることの出来ないものの存在を信じることが出来るのですか。とにかく人間が名づけ忘れていたものが見つかったら、それを私の胸に突き刺してごらんください。そして、私がそれにやはり名前を与えられなかったら、その時は私も本当に死ぬでし

よう。(『異端者の告発』154頁)

一連の対話のなかでX市長は二つのことを最終的に主人公の「僕」に対して忠告する。その一つは、自分自身を「人類の敵」として告発することを止めよ、という忠告である。つまり、物事の成り行きに忠実であれ、ということである。その二つめは、物事に名前を付けることを認めよ、ということである。つまり神なき世にあっては、とりあえず人間が物事の価値基準を決定してもよいのではないか、むしろ、そうしたほうが人間は生きてゆけるのではないかと忠告している。

主人公の生き方に対するこのような忠告はカフカの『審判』„Der Prozeß“においても認められる。『審判』の主人公のヨーゼフ・Kは自分の無罪証明を獲得するために、弁護士、裁判官の肖像画を描く画家等に協力を求めるが、いずれも無罪釈放の確約をとることはできない。その時、僧侶が出現してヨーゼフKの行うべき行動を暗示する。<sup>6)</sup> そのもたらす効果は別にして、彼に対する僧侶の忠告というストーリーの運び方は、『異端者の告発』のX市長の役割に類似している。

X市長の発言を聞いて、主人公の「僕」は深い屈辱を覚える。そのような絶望感からふと我に帰ってみると、X氏が銅像に変っているのを発見する。そして殺人未遂で逮捕された警察署で、X氏は自分の分身であることを発見する。すなわち、物語の当初からつきまとっていた男、そして、河向こうの町の元市長のX氏は、いずれも主人公の「僕」の分身であったことが判明する。主人公の「僕」の心の中に潜むもうひとつの自我が、彼の周囲に絶えずつきまとっていたわけである。このことはとりもなおさず、主人公の「僕」の心の中に、「人類の敵」であろうとする意志と、「人類の味方」であるという二つの相反する考えが共存していることを意味する。

以上『異端者の告発』について、そのストーリーの展開を分析することにより、作品の構成を論じ、かつまたテーマについても最少限にその概要を述べてみた。それによると『異端者の告発』は三つの点において、それぞれドイツの作家・思想家に類似していることが判明した。その第一は、冒頭部分の発想がニーチェの『楽しい知識』を意識している点である。第二番目として、ストーリーの展開がカフカの作品、とくに『審判』を参考にしたと思わせる部分があるということである。第三番目としては、テーマそのものもニーチェ、そしてまたカフカの影響を受けていると類推される。第一番目と第二番目についてはこれまでの叙述で検証しているので、次の章では安部とニーチェの「神に対する考え方」について論じてみたい。

## 第二章『異端者の告発』と『楽しい知識』

### 1) 『異端者の告発』における神の意味

本論の冒頭部分でも論じたように安部の『異端者の告発』は明らかに、ニーチェの『楽しい知識』を意識し、かつそれに啓発されたものと思われる。つまり、「神の死」についての問題提起がそれである。

先ず安部の「神」の概念について作品を例に挙げながら具体的に検証してみよう。冒頭部分で主人公の「僕」は「この世にもはや裁く者がいないなどと信ずることが出来るだろうか」と述べ、その直後それを肯定して、「しかし事実なのだから仕方がない」と、そのまま結論付けている。この発言によって明らかに文字どおり神の死が宣言される。

ところで、主人公の「僕」の考えている神とはどのような神であるのか。それについて安部は、ひとつの暗示を与えている。その暗示から神の姿を思い浮かべることができる。

#### a) 神の意味について(1)

彼によれば神を必要としている人間とは、

「どうしても他人と歩調を合わせることでできない人間、どうしても他人の歩調を覚えることでできない人間、どうしても歩調の存在など考えることの出来ない人間」(『異端者の告発』135頁)ということになる。

作者の安部が描くこのような人間とは、ごく普通の市民のことである。法律に従って生活し、金を儲けることも知らず、悪いことも出来ない。どこにでも住んでいる普通の市民のことである。そのような市民が生活の支えとするのは法律である。ところが、そのような法律が消えてしまったのである。つまり、普通の市民が「神様」と考えていた法律が、主人公の「僕」の世界から消えてしまったのである。このことは作者の安部に即して解釈するとどうということになるのであろうか。以下に述べる針生一郎との対談がヒントを与えてくれる。

……実存主義がこわれはじめたのは終戦後の体験だよ。瀋陽に一年半ばかりいた。社会の基準が徹底的にこわれるところを目撃して来たわけだ。恒常的なものに対する信頼を完全に失った。俺にとっちゃ大変ありがたいことだ。<sup>7)</sup>

つまり終戦直後の旧満州で、安部は、「社会の基準」が徹底的に壊されるのを目撃している。上に続く対談の中で、安部は、かなりの間無警察状態のなかで暮らし、政府や警察がない状態のなかで生活することは、想像に絶する体験であった、と述べている。

『異端者の告発』の冒頭部分の描写の背後には、安部のこのような深刻な体験があったことはまぎれもない事実である。したがって安部における神なき世界とは、先ず第一の意味としては支えとなるべき法律をなくした社会を意味している。したがってこの場合の神は、社会の基準となるべき「法律」と解釈してよいだろう。

#### b) 神の意味について(2)

これは形而上学的なテーマを有している。それは冒頭部分に続く次の文章、「だが、すでに神は死に、一切が人類の手に与えられた今、真の裁き手はもういないのだ。」という文章によって明らかになる。これまでは価値判断の基準をすべて神に委ねていた。人間は神の意志に基づいて行動すれば、その良心を満足させることができた。しかし、神なき後では、命令を下すべきものがなくなったので何を基準にして生きてゆくか、その判断をもなくした。したがって、「〈名づける〉ことが存在の征服である」(『異端者の告発』141頁)という考え方は、そもそも間違いであるということになる。〈名づける〉ということは、物事の内容を把握し、それにしかるべき価値を与えることである。しかし、神なき世界では、すべての価値の基準が崩壊してしまい、人間は、もはや物事の内容を規定することはできない。それ故にこの世界の様々な出来事を〈名づける〉ことはできない。

したがって第二の神の死の意味は形而上学的な意味での価値基準の喪失ということになる。これはまさしく「根拠を奪われた自己の存在を見つめる」<sup>8)</sup> ことにも通じる。

#### 2) 『楽しい知識』における神の意味

『楽しい知識』のなかでニーチェは神の死について次のように述べている。

狂気の人間は彼らの中にとびこみ、孔のあくほどひとりびとりを睨みつけた。「神がどこへ行ったかって?」、と彼は叫んだ。「私がお前たちに云ってやる! 私たちが神を殺したのだ——お前たちと私がか! 私たちはみな神の殺害者なのだ! だがだが、どうしてそんなことをやったのか?

.....  
神だって腐るのだ! 神は死んだ! 神は死んだままだ! それも私たちが神を殺し

たのだ！ 殺害者中の殺害者である私たちは、どうやって自分を慰めたらいいのだ？ 世界がこれまでに所有していた最も神聖なもの、最も強力なもの、それが私たちの刃で血まみれになって死んだのだ。

Der tolle Mensch sprang mitten unter sie und durchbohrte sie mit seinen Blicken. Wohin ist Gott? rief er, ich will es euch sagen! Wir haben ihn getötet—ihr und ich! Wir alle sind seine Mörder! Aber wie haben wir dies gemacht?

.....  
auch Götter vergessen! Gott ist tot! Gott bleibt tot! Und wir haben ihn getötet! Wie trösten wir uns, die Mörder aller Mörder? Das Heiligste und Mächtigste, was die Welt bisher besaß, es ist unter unseren Messern verblutet—<sup>9)</sup>

安部の『異端者の告発』における「神」の概念と、ニーチェの「神」の概念との間には大きな違いが認められる。この『楽しい知識』において、ニーチェの『狂気の男』は、自分ならびに自分と同じ人間たちが神を殺した、と宣言する。これは『異端者の告発』の神の死とは本質的に異なっている。ニーチェの「神」は人間が殺したのである。それに対し、安部の「神」は、人間の意志とは関係なく神が人間の許を去ってしまった。

この両者の違いはどのように解釈すべきであろうか。この疑問を解き明かすためには両方の神の性格についてその特徴を明らかにする必要がある。

安部の神の概念についてはすでに二つに区分してその意味を分析している。そのひとつは社会的規範の神であり、他の一つは形而上学的基準としての神であった。したがってそこには宗教的な意味での神の入り込む余地はなかった。

しかるに、ニーチェの主張する「神の死」

とは徹頭徹尾キリスト教の神の死のことである。本論の第一章で引用した箇所的一部分を再度紹介してみよう。

私たちの快活さが意味するもの——近代の最大の出来事——「神は死んだ」ということ、キリスト教の神への信仰が力を失ったこと——このできごとは早くもその最初の暗影をヨーロッパに投げはじめている。  
(Fünftes Buch, Wir Furchtlosen, S. 573)

つまり、ニーチェはキリスト教の神への信仰が信ずるに足らぬものになったがゆえに、「神を殺害した」といえる。

それではどうして神への信仰が信ずるに足らぬものになったのであろうか。キリスト教はヨーロッパ文化の真理概念、道徳概念であり、中世を経て近代に到るまで価値の基準をなすものであった。しかし、ニーチェは、かつては絶対的な価値を有していたそのようなキリスト教を否定してしまったのである。

『楽しい知識』ならびに「神の死」については多くの研究成果があるが<sup>10)</sup>、本論では秋山英夫の『ニーチェ——神の殺害者』<sup>11)</sup>を参考にして、論じてみたい。

秋山氏は摂理観をもとにして「神の死」を解説している。それによれば、ニーチェは人生に対する真剣さと責任のために、神の存在を許そうとはしない。つまり、「人間が本当に真剣に人生と取り組み、生きることに自分で責任を持つためには、神は余計な存在であり、この世に百パーセントの意味を持たせるためには、神は存在してならず、また存在すべきではない」(同書44頁)、と説明する。さらに秋山氏は、このことを一般的に述べると次のようなことになる。と解説する。「神がいっさいを導いているような世界では、人間はいわば操り人形にすぎず、神の下僕(しも)であって、まだ「主人」ではない。いっさいが神の御手にあると考える立場では、結局われわれ

個人は、この絶対的実存の単なる様態にすぎなくなってしまう。それは結局、あなたまかせの生活態度をもたらし、真剣さと責任において欠けることになる」(同書46頁)。

したがって、「神の摂理」を信じる人は、究極的には神の上にあぐらをかいていると言っ  
てよい、と解説している。このような前提に  
たって考えると、ニーチェの「神は死んだ」  
という発言は、「神が信じられなくなった」と  
いう消極的な意味あいで行われているのでは  
なくて、「神を信じてはいけない」という積極  
的な姿勢からなされている」(同書47頁)と、  
秋山氏は結論付ける。<sup>12)</sup>

秋山氏のこの結論は正しい。これはそのま  
まニーチェと安部との神に対する考え方の相  
違にあてはまる。ニーチェと比べて、安部の  
発言は、「神を信じてはいけない」という積極  
的な姿勢からはなされていない。神がいつの  
間にか消滅していたのである。しかも安部の  
心のなかにある神は先述したようにキリスト  
教の神ではない。宗教的な神は安部の文学に  
はみられない。ニーチェの父は牧師であり、  
母もまた牧師の家系であり、敬虔なキリスト  
教の雰囲気の中で育ってきた。いわば彼の  
頭脳にはキリスト教の圧倒的な歴史が詰め込  
まれていたわけである。その彼が、自らの血  
液であり、かつ肉体であるキリスト教の神を  
追放した。つまり、ヨーロッパの文明がこれ  
まで築いてきた真理概念やキリスト教的世界  
観を再検証し、その拘束から自己を解放しよ  
うとした。

それに対し、安部における第一の「神の死」  
は、先述したように社会の規範がなくなった  
ことに起因していた。そして、安部における  
第二の神の死、正確に言えば、『異端者の告発』  
の主人が感じた神の死は、非キリスト教的な  
意味での神の死であり、彼がそれ以前にヤス  
パーズ、ハイデッガー等の実存主義の洗礼を  
受けていたことに影響されたといえる。

### 第三章 『異端者の告発』の主人公と ニーチェの登場人物

#### 1) 『異端者の告発』の主人公

『異端者の告発』の主人公は「神の死」を認  
識し、それに対処するためにひとつの行動に  
でる。それを安部は次のように叙述している。

確かに僕は、資格を持たぬ身だ。しかし君  
達はそれを正当に咎める値打ちさえないと  
言うのか。僕にも自尊心くらいはある。そ  
うだ、僕の自白を受けつけないのなら、僕  
は自分で判決を下して見せてやろう。僕は  
有罪だ。僕は悪党だ。僕は人類の敵なのだ。

(『異端者の告発』135頁)

主人公の「僕」は、新しい神を積極的に求  
めることをしない。むしろ、「神の死」をその  
まま受け入れて、そのなかで、新しい自分の  
生き方を見つけようとする。それは自分自身  
を告発し、有罪の判決をしてもらうことであ  
る。

それではなぜ彼は有罪であり、かつ人類の  
敵なのであろうか。それについては次のような  
回答が考えられる。これまで主人公の「僕」  
は神の存在を信じていた。そしてすべての行  
動の規範を神に仰いでいた。しかるに神が死  
んだ今となっては、行動の基準となるものが  
ない。したがってその行動は支離滅裂なもの  
となり、統一性がない。それゆえに、主人公  
の「僕」はそのような自分のあやふやな態度  
を有罪である、と感じたのである。

その後の主人公の「僕」の行動は、第二章  
でも検証したように自分の有罪を求めての旅  
である。しかし、有罪を立証してもらおうとい  
う試みはすべて失敗する。そして逆に、その  
ような考えは間違っているとさとされる。そ  
の役割をするのが、彼にまたいつく男であり、  
かつまた100年前に死亡したという下町のX  
市長である。これらはいずれも主人公の「僕」

の分身ともいえるべき人物である。

ところで有罪を思いとどまらせるということとはもっと具体的にいえばどういうことになるのであろうか。これは、要するに神なき世界でも人間は生きゆけるし、またそうしなくてはならない、ということである。これに関して、X市長は次のように述べる。

貴方がここにやって来たのはいいことでした。ここでなら私も、ざっくばらんにお話出来ます。私は貴方に同情しているんですよ。ええ、貴方の気持は良くわかります。しかし、本当にどうにもならないことですね。どうせ、なるようにしかならないものですから。(『異端者の告発』154頁)

「どうせ、なるようにしかならないものだから」というX市長の発言に、主人公の「僕」は深い屈辱を覚える。この発言は、原則とか、宇宙の公理とか、普遍的な真理を追求しても無意味であると、教示していることになる。他方、人生を健やかに生きてゆくためには「なるようにしかならない」と認識することが人生の英知ともなりうることを教えている。

『異端者の告発』の主人公は、このような賢人のことばに耳を傾けようとせず、更に、自分の有罪を主張し続ける。自分の基盤を確立するための存在探究の旅を続ける。

## 2) ニーチェの登場人物の行動

ニーチェの描く主人公たちは、自らの力で神を殺害し、神なき世界に直面する。そしてその世界のなかに空虚を見る。

私たちは無限の虚無の中を彷徨するように、さ迷ってゆくのではないか？ 寂寞とした虚空が私たちに息を吹きつけてくるのではないか。いよいよ冷たくなっていくのではないか？ たえず夜が、ますます深い夜が

やってくるのではないか？ 白昼にランプをつけなければならないのではないか。

Irren wir nicht wie durch ein unendliches Nichts? Haucht uns nicht der leere Raum an? Ist es nicht kälter geworden? Kommt nicht immerfort die Nacht und mehr Nacht? Müssen nicht Laternen am Vormittage angezündet werden?<sup>13)</sup>

そしてこの神をなくした世界で、ニーチェは超人(Übermensch)を創り出す。ニーチェによれば人間とは中間者的存在であり、したがって超克されるべき存在である。そしてその目標とすべきものが超人である、と主張する。このような考え方は、別の視点から見ると、ニーチェはその過激な反キリスト教的な態度にかかわらず、新しい神を求めたことになる。<sup>14)</sup>

しかし超人という概念を創りながらも同時にまた、彼は神なき世界を更に次のように述べる。

ニヒリズムがドアの前に立っている。あらゆる客のなかでもっとも不気味なこの客はどこからやってくるのか (Der Nihilismus steht vor der Tür: Woher kommt uns diese unheimlichste aller Gäste?)<sup>15)</sup>

ニヒリズムとは何か。至高の諸価値がその価値を剥奪されるということ。目標が欠けている。「何のために？」への答が欠けている。(Was bedeutet Nihilismus?—Daß die obersten Werte sich entwerten. Es fehlt das Ziel; es fehlt die Antwort auf das „Warum“.<sup>16)</sup>

この時点において、あらゆる価値の転換(Die Umwertung aller Werte)がなされ、キリスト教の神がその台座から崩落する。そしてその後には虚無という名のニヒリズムが

出現する。ニーチェの『楽しい知識』の狂気の男が進むべき道はこのようなニヒリズムの世界であったといえる。

### おわりに

本論で論じた『異端者の告発』は『名もなき夜のために』、『終りし道のしるべ』と同じく、安部の初期の作品群である。この3作品のなかで、『名もなき夜のために』については言語文化論究No.5の拙論で論じている。そのなかで、筆者は、極論すればこの作品は小説ではなくて『マルテの手記』についてのストーリーを追っての読後感である、と述べている。<sup>17)</sup>この期の作品群について本多秋五は以下の論評を試みている。

これらの作品は、いずれも他人に通じぬ謎めいた言葉を、自分にも意味がよくわからぬままに連らねた晦渋なものであり、存在の根源にわけ入る入口のあたりを徘徊するごとく、また、まったくの妄想妄語にストレスのごとくでもあり、私の理解するかぎりでは、一種の形而上学的抒情ないしは実存主義的美文とも評するより外ないものである。<sup>18)</sup>

適切な批評である。確かにこの時期の安部は用語の意味を適確に吟味せずに、強引に使用している場合もある。したがって文章に力み過ぎた表現がある箇所も散見される。しかしこの種の「未熟さ」はその他の作家にも見られる。たとえばカフカの初期の作品断片『ある戦いの記録—草稿Aと草稿B』<sup>19)</sup>には、感傷的な文学青年の稚拙な文章とも思われるような表現が随所にみられる。いわゆる文学作品以前の草稿ともいえる箇所が散見される。

安部の『異端者の告発』も『名もなき夜のために』と同じようにストーリーの構成、表現法においていまだ未熟な箇所が見られる。

しかし、ニーチェのいう「神の死」と、そのことがもたらした「価値の転換」を敗戦直後の日本人の精神状況と対比させ、それを受け入れた点は大いに評価すべきである。安部の文学が本格的なものとなったのは、この『異端者の告発』以後のことである。『デンドロカカリア』、『赤い繭』、『壁—Sカルマ氏の犯罪』の執筆を経て、ようやく安部は作家としての第一歩を踏み出したといえる。

次回では上記の本格的作品にはいまだ触れない。『異端者の告発』と『名も知らぬ夜のために』と同じ頃の作品、すなわちリルケとニーチェの混合物とも言うべき『終りし道のしるべ』について論じることとする。

率直に言って安部とニーチェとを同じ土俵で論ずることは不可能である。また、そうすべきではない。第一に、安部は文学者であり、ニーチェは哲学者・詩人である。第二の理由としては両者の背後に横たわる伝統と文化との気の遠くなるような違いである。安部は、批評家たちがいくら力説しようとも「日本人」である。彼の心のなかには日本人の伝統文化が否定しようもなく流れている。それに対してニーチェの精神にはキリスト教を中心とするヨーロッパ文化の伝統が脈々と流れている。つまり、数百年の歴史を経て、常に血となり肉となっていた神が存在している。その神をニーチェは必死になって追い出した。

安部の心のなかにはキリスト教的意味での神は存在しない。彼が考えていた神はいわば抽象的な神、借り物の神である。自分の存在喪失を実証するために、無理に創り出した、しかし、もっとも痛々しい現実概念としての神である。

「神は死んだ」という記述についてのみ限定すれば、ニーチェに比して安部はまさに幼児である。巨大な鉄塔の下を竹馬に乗って遊んでいる幼児である。しかし、これでもって安部の芸術作品がニーチェのそれより劣ってい

るというのでは決してない。前述したように表価の土俵が違っている。

安部のユニークさは、第二次世界大戦前後の極限状況下のなかで、「神は死んだ」というニーチェの切々たる悲鳴を、最も的確な形式で第二次世界大戦後の日本の文学に応用した

点にある。その意味では『異端者の告発』は、リルケの影響を受けて書いたとされる『名もなき夜のために』と同じく、安部の文学修業の一段階としてみるなら、最も注目すべき作品の一つである。

〔テキスト〕

テキスト 1. 「安部公房全作品 1」新潮社 昭和54年。

テキスト 2. Nietzsche, Friedrich: „Die fröhliche Wissenschaft“ (Fünftes Buch Wir Furchtlosen), Morgenröte Idyllen aus Messia Die fröhliche Wissenschaft, KSA 3, Deutscher Taschenbuch Verlag de Gruyter, 1988.

テキスト 3. Nietzsche, Friedrich: Der Wille zur Macht—— Versuch einer Umwertung aller Werte, Sämtliche Werke in zwölf Bänden, Band IX, Alfred Kröner Verlag 1964.

〔注〕

- 1) 大久保典夫: 「安部公房と敗戦体験」『国文学 (9月臨時増刊号 昭和47年) ——安部公房——文学と思想』学燈社 140頁。
- 2) 谷真介: 「安部公房・年譜 (1924~1978・8)」『作家の世界——安部公房』番町書房 昭和53年。281~282頁。
- 3) 大久保典夫: 「安部公房と敗戦体験」140頁。
- 4) Nietzsche, Friedrich: „Die fröhliche Wissenschaft“, S. 573.
- 5) Nietzsche, Friedrich: „Die fröhliche Wissenschaft“, S. 480/481.
- 6) 有村隆広: 『カフカとその文学』郁文堂 1985年。245/246頁。
- 7) この引用は以下の論文より採用した。飯島耕一: 「安部公房——あるいは無罪の文学」, 「安部公房・大江健三郎」日本文学研究資料叢書。有精堂 昭和55年。4頁。大久保典夫: 「安部公房と敗戦体験」, 「国文学 (9月臨時増刊号 昭和47年)」144頁。
- 8) 渡辺広士: 「アヴァンギャルドの迷路——安部公房論——」『安部公房・大江健三郎』(日本文学研究資料叢書) 134頁。
- 9) Nietzsche, Friedrich: „Die fröhliche Wissenschaft“, S. 480/481.
- 10) Heidegger, Martin: Nietzsche II, Verlag Günther Neske Pfullingen 1961. S. 31~55.
- 11) 秋山英夫: 『ニーチェ——神の殺害者』朝日出版社 昭和47年。46頁。
- 12) 秋山氏は、ニーチェが神に反対する第二の理由として「神の前における万人の平等」という見方が彼の意図する生の上昇・高揚と相容れなかった点を紹介している (同書46頁)。
- 13) Nietzsche, Friedrich: „Die fröhliche Wissenschaft“, S. 481.
- 14) Martini, Fritz: Deutsche Literatur, Alfred Kröner Verlag 1968, S. 475.
- 15) Nietzsche, Friedrich: „Der Wille zur Macht - Versuch einer Umwertung aller Werte“ Alfred Kröner Verlag Stuttgart 1964, S. 7.
- 16) ebenda S. 10.

- 17) 有村隆広：「安部公房の初期の作品(1)『名もなき夜のために』：リルケの影響——リルケ，ニーチェ，カフカ」言語文化論究（九大言語文化部）No.5，33頁。
- 18) 本多秋五：「変貌の作家——安部公房」『作家の世界——安部公房——』番町書房 昭和53年，61頁。
- 19) 有村隆広：『カフカとその文学』郁文堂 1985年，106～141頁。

# Der Einfluß Rilkes, Nietzsches und Kafkas auf die frühen Werke von Abe Kobo

## Teil 2 „Itansha no Kokuhatu“: Nietzsche

Takahiro Arimura

In seiner Jugend, in der sich der Zweite Weltkrieg zu Ende neigte, las Abe Kobo intensiv die Werke von deutschen Dichtern und Denkern.

Sein Frühwerk, „Itansha no Kokuhatu“, das im Jahre 1948 erschien, entstand unter dem Einfluß von Friedrich Nietzsche. Die Hauptfigur der Erzählung „Itansha no Kokuhatu“ bemerkt eines Tages, daß Gott verschwunden ist und es daher auf der Welt keinen Richter mehr gibt. Ohne Gott und ohne Bestimmung erscheint es ihm unmöglich weiterzuleben. Er wird von dem Bedanken überwältigt, schuldig zu sein und ohne Bestimmung zu handeln. Daher entschließt er sich, sich selbst anzuklagen und ist seitdem jeden Tag bemüht, einen Richter zu finden, der ihn für schuldig erklären könnte.

Auch der tolle Mensch in der „fröhlichen Wissenschaft“ von Nietzsche bemerkt, daß Gott nicht mehr auf der Welt ist. Gott verschwand von dieser Welt, weil er getötet wurde. Der Grund für dieses Tötens liegt darin, daß der christliche Gott seine Macht über den Menschen und über die Bestimmung des Menschen verloren hat.

Der Gott in der Erzählung „Itansha no Kokuhatu“ ist kein christlicher, kein religiöser Gott, sondern ein Symbol der Bestimmung des wirklichen Lebens. Nach dem Zweiten Weltkrieg herrschten auch in Japan überall Chaos und Katastrophen, alle Werte wurden in Frage gestellt und verneint. In dieser verzweifelten Grenzsituationen versucht der Dichter Abe vergebens, einen neuen Wert zu finden. Seine Hauptfigur bemüht sich zwar darum, nach einer absoluten Bestimmung zu streben, fürchtet sich aber zugleich davor, sein Leben eigenverantwortlich zu entscheiden.

Der tolle Mensch in der „fröhlichen Wissenschaft“ tötet Gott. Sein Verhalten ist viel aggressiver als das von Abes Hauptfigur. Der Schöpfer der Figur des tollen Menschen, Nietzsche, schuf nach Gottes Tod den Begriff „Übermensch“, der zu einer neuen Bestimmung werden sollte. Dadurch verwirklichte Nietzsche die Umwertung aller Werte.

Abe Kobo durchschaute zwar die Gedanken Nietzsches, wollte jedoch Nietzsches Denken nicht folgen, da er als Nicht-Christ nicht in der Lage war, den Gott zu verleugnen. Er rezeptierte daher nur den Begriff „die Umwertung aller Werte“ und benutzte ihn bei der Niederschrift seiner Erzählung „Itansha no Kokuhatu“, in der die Angst und Verzweiflung des modernen Menschen nach dem Zweiten Weltkrieg ausgedrückt wurden.